

ドイツ・フライブルクカソリック大学との交流

— 2011～2013年教育実践総合センター活動報告 —

岡田 珠江*

三重大学教育学部附属教育実践総合センターでは、2011年度より3年間に渡りフライブルクカソリック大学 (Katholische Hochschule Freiburg / Catholic University of Applied Sciences Freiburg) と国際交流を進めてきた。本稿では2011年から2013年までの3年間に渡るセンターとフライブルクカソリック大学との交流実績を報告するとともに、特に2013年度は広範囲に渡る交流が展開されたので、これらについてはその詳細を紹介する。

各年度に行ったのは、附属教育実践総合センター教員と大学院生・内地留学生 (現職教員) が、フライブルクカソリック大学や市内の小中学校、幼稚園、シュタイナー学校、周辺の教育施設を訪れ、交流することである。これは訪問者にとって非常に貴重かつ意義深いものであった。また、フライブルクカソリック大学からは2012年度と2013年度は2名の教授が三重大学を訪れ、教育学部ならびに教育学研究科の授業や講演を行った。2013年度はフライブルクカソリック大学学生 (大学院生1名と学部生1名) がドイツ学術交流会 DAAD の支援プログラムの一環として、三重大学に1ヶ月程の短期留学を行った。このように教育実践総合センターでのフライブルクカソリック大学との国際交流は、年を追う毎に交流の幅を広げて展開し、実績を重ねてきた。本事業の成果は、研究、教育、地域への貢献等、様々な側面に現れており、本事業の継続は教育学部として、また当センターとして非常に大きな意義があると考えられる。

キーワード：国際交流、フライブルクカソリック大学

1 事業の背景と本論の目的

1) フライブルクカソリック大学について

フライブルクカソリック大学 (Katholische Hochschule Freiburg / Catholic University of Applied Sciences Freiburg) は、1971年に設立され、ドイツ国に認定された、カソリック系の大学で、福祉事業、健康管理、インクルーシブ教育、運営と倫理の分野にて、学士号、修士号を授与している。ドイツ内外からの約1400名の学生を有する。大学の特徴の1つは、Institute for Applied Research, Development and Further Education に属する7つのセンターが、応用を目指す研究を多く行っていることである。フライブルクカソリック大学の国際性は、多くの大学との提携に表れている。特にインターナショナルマスターコースは他国の多くの大学と協定を結び、国際交流を推進している状況にある。(フライブルクカソリック大学のホームページ他より)

2) 2011年までの交流

2002年10月～2003年7月；筆者がハンペ教授 (Prof. / Dr. Ruth Hampe, 当時ブレーメンの大学教授、現在はフライブルクカソリック大学教授、アートセラピー

専攻のコースの責任者) のもとに、文部科学省 (当時文部省) 在外研究員として滞在した。これ以前より筆者とハンペ先生の研究交流があった。

2009年6月～7月：フライブルクカソリック大学のハンペ先生が、三重大学との研究交流を含めた研究助成金をドイツ学術交流会 (Deutscher Akademischer Austausch Dienst, DAAD, German Academic Exchange Service) に申請するにあたり、センター内で国際交流の可能性について討議した。

2009年9月28日；アイサーブ研究会で、ハンペ先生「ドイツの学校におけるアートを用いた問題解決」と題して講演した。^{注1}

そして2011年度より三重大学教育学部附属教育実践総合センター (以下、センターと略記) では、研究者個人ではなく、組織として2011年度よりドイツ・フライブルクカソリック大学と国際交流を進めてきた。

本論の目的は、2011年から2013年までの3年間に渡るセンターとフライブルクカソリック大学との交流実績を報告することである。それとともに、特に2013年度の交流は活動範囲が大幅に広がったことから、2013年度については活動の詳細を紹介したい。

*三重大学教育学部附属教育実践総合センター

2 交流実績

1) 2011 年度

A. フライブルクカソリック大学への招待訪問

- a) 日程；2011 年 10 月 1 日～11 日
- b) 内容；フライブルクカソリック大学への招待訪問し、幼稚園、小学校、中学校（シュタイナー教育・モンテッソーリ教育実践校等）を訪問し、大学にて講演した。
- c) 訪問者；センター教員：須曾野仁志教授、センター内地留学生等：4 名
- d) 交流助成金；滞在費がドイツ学術交流会より支給



写真1 2011 年度 フライブルクカソリック大学訪問

2) 2012 年度

A. フライブルクカソリック大学への招待訪問

- a) 日程；2012 年 10 月 5 日～13 日
- b) 内容；フライブルクカソリック大学への招待訪問し、幼稚園、小学校、中学校（シュタイナー教育・モンテッソーリ教育実践校等）を訪問した。また、フライブルクカソリック大学の学生・教員らと一同に会し、三重大学からの参加者全員がミニプレゼンテーションを行って交流会を持った。
- c) 訪問者；センター教員：下村勉教授、センター内地留学生等：5 名
- d) 交流助成金；滞在費がドイツ学術交流会より支給

B. フライブルクカソリック教授の三重大学訪問その 1

- a) 日程；10 月 25 日～11 月 1 日
- b) 内容；八木規夫教育学部長表敬訪問、ならびに教育学部学校教育講座瀬戸美奈子准教授の大学院及び学部授業にて「描画療法発展の歴史的側面」と題し講演（英語教育早瀬光秋教授通訳）をした。また、教育学部附属特別支援学校、三重県立小児心療センターあすなろ学園、三重シューレ（フリースクール）訪問した。
- c) 訪問者；ハンペ教授（Prof. / Dr. Ruth Hampe, ; フライブルクカソリック大学教授、アートセラピー専攻のコースの責任者）

- d) 交流助成金；旅費と滞在費がドイツ学術交流会より支給

C. フライブルクカソリック教授の三重大学訪問その 2

- a) 日程；11 月 12 日～18 日
- b) 内容；三重大学内田淳正学長表敬訪問、八木規夫教育学部長表敬訪問、教育実践総合センター主催 iCERP 研究会にて講演「ドイツの学校におけるインクルーシブ教育」（フライブルクカソリック大学広江直美氏通訳）、学校教育講座伊藤敏子教授、特別支援教育大谷正人教授、幼児教育講座吉田真理子講師等が参加出席。また、医学部附属病院看護部及び病棟訪問、教育学部附属特別支援学校も訪問した。
- c) 訪問者；ケスラー教授（Prof. / Dr. E. Kössler ; フライブルクカソリック大学ケスラー学長）及び広江直美（フライブルクカソリック大学国際交流担当）
- d) 交流助成金；旅費と滞在費がドイツ学術交流会より支給

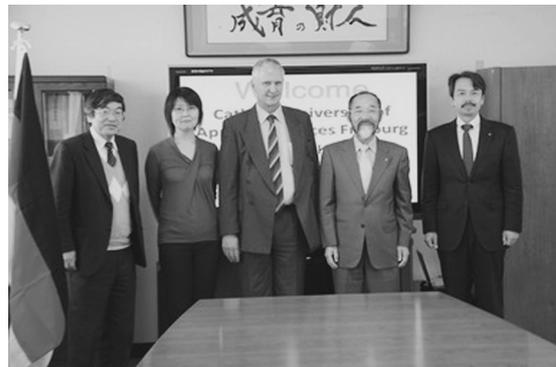


写真2 2012 年度 三重大学内田淳正学長表敬訪問

3) 2013 年度

A. フライブルクカソリック大学への招待訪問

- a) 日程；2013 年 6 月 20 日～28 日
- b) 内容；フライブルクカソリック大学への招待訪問し、教員相互の研究に関するプレゼンテーションと「インクルーシブ教育の概要と小・中学校での特別支援教育のシステム」をテーマに討論を行った。また、以下のフライブルクにある 7 つの教育施設を訪問し、交流を行った。
 - ①Zentrum Insel（教育的支援コミュニティ施設）
 - ②Freie Schule Dreisamtel（モンテッソーリ教育のフリースクール）
 - ③Vigilius GrundSchule、Vigilius II Werkschule（公立の小・中学校）
 - ④Freiburger StrassenSchule（若者のホームレスのための自立支援施設）
 - ⑤Maria Montessori Grundschule（モンテッソーリ教育の私立小学校）
 - ⑥Kinder-und Jugendtreff Haslasch（公立の放課後の

支援施設)

⑦Staudinger Gesamtschule (公立中学校)

- c) 訪問者；センター教員；センター教員：岡田珠江准教授、センター内地留学生 2 名
- d) 交流助成金；教員分旅費は平成 25 年度三重大学国際交流事業より支給、滞在費はドイツ学術交流会より支給



写真 3 2013 年度 フライブルクカソリック大学訪問

B. フライブルクカソリック大学教授の三重大学訪問

- a) 日程；2013 年 12 月 7 日～16 日（三重大学国際交流週間 12 月 12 日～19 日に合わせて来訪）
- b) 内容；三重大学を訪問し、センターにて授業“Teaching mindfulness in school”（ロースラー教授講演、数学教育新田貴士教授通訳）“Inclusion and the meaning of artistic expression and institutional offers”（ハンペ教授講演、岡田珠江准教授通訳）、②講演“Couple and family therapy in Germany”（ロースラー教授講演、岡田珠江准教授通訳）“The psychological support with art for pupils in special needs education”（ハンペ教授講演、広江尚美氏通訳）アイサーブ研究会（センター主催）、③授業のゲストスピーカーとして参加「ドイツのソーシャルワーカーの仕事」（広江尚美氏）④三重大学国際交流センター長堀浩樹教授表敬訪問
- c) 訪問者；ハンペ教授（Prof./Dr. Ruth Hampe,；フライブルクカソリック大学教授、アートセラピー専攻のコースの責任者）、ロースラー教授（Prof./Dr. C. Roesler；フライブルクカソリック大学教授）、及び広江直美（フライブルクカソリック大学国際交流担当）の 3 名
- d) 交流助成金；旅費と滞在費がドイツ学術交流会より支給

C. フライブルクカソリック大学学生の訪問その 1

- a) 日程；2013 年 5 月 2 日～25 日
- b) 内容；三重大学へ短期留学（研究題目：トラウマとトラウマセラピー、受け入れ教員；岡田珠江准教授）
- c) 訪問者；フライブルクカソリック大学大学院生 1 名（ドロテア・ジンガーさん；Ms. Dorotea Singer）

- d) 交流助成金；旅費と滞在費がドイツ学術交流会より支給

D. フライブルクカソリック大学学生の訪問その 2

- a) 日程；2013 年 8 月 28 日～10 月 3 日
- b) 内容；三重大学へ短期留学（研究題目：自閉症の子どもを対象にした学校教育とアートセラピー）受け入れ教員；岡田珠江准教授）
- c) 訪問者；フライブルクカソリック大学学部生 1 名（サラ・アテンスさん；Ms. Sarah Athens）
- d) 交流助成金；旅費と滞在費がドイツ学術交流会より支給

3 2013 年度の交流の紹介

A. フライブルクカソリック大学への招待訪問と大学周辺の教育施設を訪問交流について

全ての教育施設の詳細について紙面の都合上ここでは言及できないが、総じていえば文化の差異があるものの、ドイツにおける子どもの主体性を重んじた教育への姿勢は強く印象に残った。これは日本の教育においても学ぶべき点であると考えられる。

具体的に小学校の様子で述べると、ドイツの学校制度では小学校は 4 年間であるが、クラス替えもなく、担任も変わらない。しかし申し出ればクラスを替えることは可能である。また、教科書や教材は担任の裁量で選択され、野外活動等の取り入れも担任次第である（学年や学校単位で決められていない）。日々の学習スケジュールが明示されており、個々の学習の進捗によって異なる教材に取り組む様子も見られた。授業時間中、日本では先生が机間巡視をするのをよく見かけるが、ドイツでは児童生徒が質問したいときには手をあげたり先生のところまで尋ねに行ったりする。突然の来訪者であった私たちにも積極的に質問する姿が見られた。各学級は 2 つの部屋を使用しており、通常は広い部屋が全体の授業で使用されるが、個々に支援が必要な子どもは、隣にある狭い部屋で個別に対応されていたり、いわゆる「取り出し」授業として少人数で芸術療法（描画、ドラマ）や言葉の教室での活動を各々の専門家（非常勤）が行ったりしている。

また、ストリート生活をしている若者の自立支援施設（ドイツ国内でも唯一の施設）や公立の放課後の児童支援施設では、スタッフであるソーシャルワーカーが最低限の規則や活動内容の提供・支援（例えば描画・音楽・演劇・運動等の芸術創作活動ができるような部屋や材料の準備）をするものの、来訪者自らの主体的な活動を大切にしている様子がうかがえた。

このような主体性の重要視は、実はその行動が全て個人の責任で行われることと表裏一体になっている。先に

クラス替えがないことや教科書や教材が担任の裁量で選択されることを述べたが、裏を返せば小学校4年間の教育を担当が責任を持って指導するということである。1年という時間単位で見れば多少の教科の進度の遅れがあっても構わないが、4年間終了時にはきっちりと終えなければならない。一方、学習で十分に習得できなかった子どもは小学校でも留年もする。また、小・中学校の児童生徒用ロッカーは全て鍵がついており、持ち物の管理は児童生徒個人の責任で、学校の教室、トイレに至るまで全ての施設が施錠され、教師が管理している。

これらのドイツの教育に見られる日本の教育との差異は、「違い」であってどちらかのあり方が「間違い」である、あるいは「正しい」のではない。文化的背景があるので簡単に述べることはできないのである。しかし、違いを目の当たりにすることによって、当たり前になっている自国の教育の在り方を改めて見つめ直す貴重なヒントや気づきが得られる。このような経験は、学校教育に関わる者にとってとても貴重なものであり、経験した事柄は機会を見つけて伝えていきたいと考えている。^{注2}

その他今回の訪問で学んだことの幾つかを紹介する。訪問した教育関連施設で出会ったソーシャルワーカーの方々はフライブルクカソリック大学出身者であった。大学における研究や教育が、卒業生の活躍している機関と様々な側面で連携して行われており、連携のモデルになる素晴らしい形態であると思われた。また、交流にあたってはフライブルクカソリック大学国際交流担当教授や事務担当のコーディネーターがあり、さらに5月に留学した大学院生の側面的支援もあった。三重大学国際交流助成金取得にあたっては、国際交流委員会委員の先生方にもご心配を頂いた。センターで行っている国際交流は公的な協定もないが、多くの人々の温かい心の交流と下支えがあり、国際交流の原点に通じる学ぶべき事柄であると考えられる。以上のように現地訪問によってしか得ることができない体験を通じた、生きた研究交流ができたことは非常に意義深いものであった。

B. フライブルクカソリック大学教授の三重大学訪問時の講演・授業

a) “Teaching mindfulness in school” (ロースラー教授講演、数学教育新田貴士教授通訳)

マインドフルネスは、小乗仏教の用語で日本語訳は「観照」である。ヨーロッパでは、この概念を臨床的、教育的観点で用いられている。具体的には、ストレスの低減 (Kabat-Zinn)、集中力・認知力の向上等であり、これを小中学校でも扱うことができることをエクササイズを通して教示してもらった。

小中学校で扱う際には、次のような知識を提供する。子どもは心配事や抱えている問題に圧倒されがちであること、しかし心配事や問題は自分全体ではなく一部分で

あるためそのことから距離をとること、問題に取り組まなければ解決はできないこと、取り組みつつ距離を保つこと、問題や心配事を置いておく (自分の身体のどこか) 適当な場所を見つけること、その場所で解毒すること、内的援助となるフィギュア (スーパーマン等) を見つけること、問題が何も解決しなくても平穏な気持ちでいられるようになることである。

マインドフルネスのエクササイズとしては、食べること、歩くこと、座ること等を導入として行う。これらは日常意識せずに行っている動作を、五感を集中させて行う。さらに簡単なエクササイズとして、数えながら呼吸する、ベルが鳴るのを聴く、光に満たされていることを想像する等を行うことができる。これらのエクササイズを授業開始前や休み時間に毎日実践できるとよい。その際には互いにクラスメートを気遣ったり、係等の役割をあてたりするとよい。

講演では実際に小さいクラッカーを口に含んで味わうことやリラックスして光に満たされるイメージの体験を行い、実感として子どもへの施行法を知ることができた。

b) “Inclusion and the meaning of artistic expression and institutional offers” (ハンペ教授講演、岡田珠江准教授通訳)

障がい児者の芸術的表現がどのように社会的に認められるようになったのか、またインクルージョンの概念が認知されるに至った経緯について、それらの歴史的展開について、多くの画像を提示しながら説明された。

その中で芸術的活動を行うことの意味について、以下の事柄が説明された。

- ・誰もが資源 (Resource) を持っており、それが方向づけになる。
- ・マインドフルネスを得る。
- ・「出会い」において行われる。
- ・能力を高める。
- ・それぞれの目的を促進する。
- ・創造性を活性化する。
- ・日常生活とそのパターンを作るのに役立つ。

さらに最近の傾向として、コンピューター等の新しいデジタルメディアを使った動作認知やアニメーションを用いた芸術作品の制作法について紹介された。デジタルメディアは、障がい児者にとって表現困難な部分を補足するのに役立つ。また、義務教育を終えた後もなお、認知的観点や社会的交流の観点・創造的な活動の観点から能力を持続、発展させていくことを促進するために有効であろうとのことであった。

講義の後で、簡単にできる描画を用いたワークを実施した。受講者は、近年2、3年のライフラインを線で描き、その最高に良かった時期のシンボルと最悪であった時期のシンボルをクレヨンや色鉛筆で描き、その後別の

画用紙に2つのシンボルを統合させる描画を行った。

一般的には最高に良かった時期と最悪だった時期は別々の事のように受け止められるが、このワークで受講者は自分の精神生活を振り返るとともに、実は最悪だった時期から学ぶことがあったりそれぞれの時期が関連していたりすることに気が付く経験をした。

c) “Couple and family therapy in Germany” (ロースラー教授講演、岡田珠江准教授通訳)

ドイツにおいて家族療法は、精神分析、行動療法と並んで主要な心理療法に挙げられる。家族療法では、カップルが影響しあっている関係を捉え、家族の構造と心理分析的アプローチを組み合わせて対応する。年齢の若いカップルにはコミュニケーションのトレーニングとして教育的なコースも週末に提供している。

既婚者の家族には、「子どもと青少年の支援」「健康保険システム」「介護」の3つの社会福祉関連の法律があり、広範囲にわたってサポートされる。

キリスト教カトリックの教会では、社会的法律とは独立して夫婦カウンセリングを実施してきた歴史的経緯がある。1911年に始まり、現在も年間500か所のカウンセリングセンターがあり、10万件程度の相談を請け負っている。収入に応じて相談料を支払うシステムになっており、相談員はフライブルクカソリック大学のような教会とは関係のない教育機関で養成されている。

主訴の主たるものとして、カップルに関連したものは約7割がコミュニケーションの問題、約6割が仲たがいで協働できない、4割が喧嘩、3割が性的問題、として挙げられる。家族に関連したものでは、2割が教育的問題、1.5割が両親と祖父母の関係の問題、約1割が子連れ離婚と再婚を繰り返した新しい家族（パッチワークのような家族）の問題、金銭的な問題等である。

講師はユング派心理学者でもあり、来談したカップルに箱庭制作を行うこともあるということで、箱庭制作を実施した事例の紹介があった。具体的に夫・妻各々が制作した箱庭には、それぞれの想いが表現されており、多くのことを言葉で語らずともその心情が良く伝わってくるものであった。

d) “The psychological support with art for pupils in special needs education” (ハンペ教授講演、フライブルク大学広江尚美氏通訳)

まず、近年の神経生物学的研究調査からわかっていること、模倣による学習がミラーニューロンによって生じる仕組み、感情の持つ役割について説明された。

次に、芸術を使った教育的支援には様々な意義があることが示された。具体的にはリラクゼーションの提供、ストレスの低減、イメージと内的イメージの活性化、能力資源の活かし方を方向付けること、心理的安定の促進、集中して作業に没頭した時のフロー（flow）

感情の体験、「生」の感覚を与えたり固定化したものを変化させたりすること等である。中でもイメージーションの中では過去の経験が蘇ったり、新たな試行ができたりし、視覚だけでなく五感をフルに使って感じる体験になるので、イメージーションは芸術を用いた支援をする際に有効に働く。これに加えて A. Antonovsky (1979) が提唱する、健康でいるための要素には①物事を理解できる感覚②行動をコントロールできる感覚③物事の意義づけができる感覚があり、この3つを統合することが必要である。

また、実際にフライブルクで行われている事業から得られた知見が紹介された。①現職教員を対象としてメンタルヘルスの予防としてコーチングを行っていること②学校教育システムの中でソーシャルワーカーが活躍していること③学校でのインクルーシブ教育としてアートセラピーを実施していることである。^{註3} ③のアートセラピーの実践については、様々な課題を抱えた子どもに対して実際に行った事例を多く取り挙げて、作品と共に紹介された。

e) 「ドイツのソーシャルワーカーの仕事」(広江尚美氏)

フライブルクカソリック大学では、ソーシャルワーカー学科で専門職になる人を養成しており、卒業生が地域で活躍していることを踏まえて、実際のソーシャルワーカーの仕事についてわかりやすく説明された。概要は以下のようなものである。

ドイツの学校では、学校規模（児童生徒の人数）によるが、1~3人のソーシャルワーカーが勤務している。家族や学校で生じている問題を理解し、問題解決を図るために支援をする。学校では喧嘩が頻繁に起こるため、喧嘩の仲裁、対決の解決、暴力予防、その後のケアをする。時に教員同士の諍いの仲裁に入ることもある。また、地域社会でのネットワークを使った活動もするため、学校のイベント（夏祭り等）に参加することもある。

ドイツでは移民が児童生徒の半数程度を占めるため、例えばイスラム教の食事・文化・慣習を理解してもらうための働きかけもする。離婚率が高く、金銭的な問題を抱えた家庭に対して公的な支援が得られるように働きかけをすることもする。

ソーシャルワーカーは、コミュニティに入って人間の生活全体を把握することが必要になるので、コミュニケーション能力が大事である。コミュニケーション能力を高めるために、ぶつかり合うことを恐れずに様々な人とつきあって、人間エキスパートになることが必要である。

C. フライブルクカソリック大学大学院生・学生の訪問

a) 研究題目：トラウマとトラウマセラピー

主たる活動概要は以下の通りである。

- ・教育学部「教育臨床」（担当教員：岡田珠江准教授）授業（テーマ：トラウマとPTSD）の参観

- ・三重大学学生へのトラウマに関する質問紙調査
- ・福島県での救援活動参加
- ・心理士3人へのインタビュー（三重県臨床心理士会会長、被災地でスクールカウンセラーの活動をする臨床心理士、在日スイス人のカウンセラー）
- ・公立学校3校見学（小学校、中学校、特別支援分校）の見学
- ・私立教育施設見学
- ・センター教員へのインタビュー

b) 研究題目：自閉症の子どもを対象にした学校教育とアートセラピー

主たる活動概要は以下の通りである。

- ・特別支援教育講座集中講義に参加（特別支援学校5校、特別養護老人ホーム2か所の見学実習）
- ・アートセラピーを実施している障がい者支援施設2か所の見学
- ・特別養護老人ホーム3か所の見学

4 交流の意義と発展性

本事業の以前には、個人の臨床心理学分野での研究交流があった。それを土台に2011年度より組織として国際交流を重ねてきた。センターの組織として対応を開始したことにより、センターの特徴である（同じ教育領域でありながら）多分野の専門を有した教員・センター内地留学生とフライブルクカソリック大学との間に交流の輪が広がり、さらに2012年度には特にハンベ先生とフライブルクカソリック大学ケスラー学長の訪問により、センターの所属教員、学生のみではなく、教育学部学生、英語教育講座、学校教育講座、特別支援教育講座、幼児教育講座等の学部教員レベルでの交流、ならびに医学部附属病院での交流や地域の教育臨床の場での交流へと発展した。

2013年度は、教員・内地留学生を中心とした相互訪問、研究交流のみならず、2人のドイツ人学生が個々に来日し、平均1か月の短期留学を体験した。また、三重大学国際交流センターが主催する国際交流週間に合わせてフライブルクカソリック大学の教職員が来訪して、イベントに参加した。このように教育実践総合センターでのフライブルクカソリック大学との国際交流は、年を追う毎に確実に幅広く展開してきており、実績を重ねてきた。

3年間に渡ってセンター教員と大学院生・内地留学生（現職教員）が訪独し、フライブルクの公立学校の授業に参加し周辺の教育施設訪問したり、またフライブルクカソリック大学で授業を受けたりしたが、その経験は、個々の参加者に大きなインパクトを与えるもので、その後の教育に還元されているところである。具体的には、

学校園で使われている教具や教授法の相違、インクルーシブ教育の展開、多国籍の児童・生徒への教育的配慮等を見聞きし、自らの教育実践を振り返り、より工夫を凝らしたり改善したりすることにつながっている。先述したが、違いを目の当たりにすることによって、当たり前になっている自国の教育の在り方を改めて見つめ直す貴重なヒントや気づきが得られるように思う。このような経験は学校教育に携わる者にとって、とても貴重なものである。

それに加えてセンター教員は、免許更新講習等、現職教員への教育の機会や教育学部での学習会の機会にそれらを情報提供し、三重県教員の知見を広めることに役立てることができた。そのほかセンター教員は、当地の大学の見学や議論により、それぞれのセンター業務で教育方法や心理相談のあり方、個々の研究レベルで得た知見を深めることができたことは言うまでもない。以上のようにセンター教員ならびに同行する内地留学生（現職教員）にとって非常に貴重かつ意義深いものとなった。

今後の発展性としては、フライブルクカソリック大学の教授と、実質的な共同研究を展開できる可能性、三重大学の学生がドイツに（3か月以上であれば無償で）留学できる可能性、さらに教育学部のみならず医学部教員・学生とフライブルクカソリック大学が組織的交流できる可能性等が考えられる。

このように研究、教育、地域への貢献等、様々な側面に現れており、本事業の継続は教育学部として、また当センターとして非常に大きな意義があったと考える。

最後に、本交流はフライブルクカソリック大学がドイツ学術交流会 DAAD から3年間の助成を受けて開始され、本年度で終了するが、次年度からの2年間の助成の申請をすでに行っていることを申し添える。

注1 教育実践センターホームページ <http://cerp.edu-mie-u.ac.jp/icerp-k/no-18/houkoku-18.html> を参照。

注2 第30回 iCERP 研究会（センター主催、2013年7月30日、於教育学部附属特別支援学校ひまわりの家開催）で発表した。

注3 ドイツにおけるソーシャルワーカーの仕事は、日本ではスクールカウンセラーの仕事の一部になっている。

<謝辞>

本稿の記載を快諾して下さったフライブルクカソリック大学教職員の皆様に謝意を申し上げます。